

寄稿：『情報システムにサイレンを仕込む』

㈱プライド創業者/情報学博士,学会監事 松平和也

はじめに

コロナに痛めつけられる隣人を見て、今こそ、情報システムが必要な時だと感じる。当学会では、情報システム化を深耕して、人間社会問題を解決していくべきだと言う主張をしてきた。そこで本論では、情報システムを構築していく上での肝心な点として、問題を抱える人間の発する兆候を察知しリスクの存在を関係者に警告して問題解決を徹底するべく、けたたましく鳴るサイレンを、情報システム内に仕込むことを訴えたい。サイレンを鳴らす警察車を日常見るが、ギャングの親分で有名な、アルカポネは、自分の専用車に警察の使うサイレンを仕込んで逃げ回ったと言う有名な話がある。ここでいうサイレンは、何らかの人間の出すサイン『情報』を察知したら、ここに問題ありとアクションさせる警報である。アクションしなければ、サイレンは鳴り止まないのである。要は、リスク予知機能を内包する情報システムを設計するのである。

1. 人間社会はリスクばかり

ここでは、リスクとはある事象が発生した場合に目的の達成に支障になり、関係者の不幸を招来する危険と考える。リスクを察知したら、サイレンを鳴らす情報システムを構築したいのである。そのサイレンとは、関係者や当事者の心に届く情報そのものなのである。たとえば、豪雨の予報により避難を通知するに、携帯電話器に通知したのでは、ほとんどその情報は無力である。リスクにさらされる本人またはグループ、団体に直接避難を促し、行動をとるべき情報を提供することが肝要である。拡声器にて地域に連絡したなども、ほとんど風雨の轟音にさえぎられて避難行動を促す行動に直結しないといわれている。累卵の危機とは、よく言ったものである。卵を積み重ねる危険な状況の中で、日本政府は国民の安全面を放置する国家なのである。また、より踏み込んで、減災対策に消極的な国家でもある。被害が出て、苦しむ国民のお見舞いに行くのが選挙対策上効果大と信じている劣化した政治家が多いのが嘆かわしい。この責任は、首相にある。その、首相がカケイ・モリトモ問題でその軽率な言動を問われている。首相は、国会で詰問されて、『私は、李下に冠を正さず、瓜田に靴を入れずと言う諺を知っています』と嘯いた。その嘘にちりばめられた言動により、官僚の忖度を生み出し、財務省、文科省など主要な省庁の役人が国民に対して背信行為を平気で行うことになった。政治の世界にこそ、まずサイレンを鳴らす情報システム化を進めなければならないと考えるが、この世界は百年河清を待つがごとしである。政治倫理規定があるが、まったく役に立っていない。

2. DVによる幼児死亡の皆無を目指そう

社会問題で、幼児死亡の事件が次々と報じられて、善良なる日本国民の心を暗くする。

2016年度に児童相談所で扱った事件数は、12万件を超えている。たいていは、男親か、女親、または二人で行う犯行である。加害者は7割が実親だと言う統計がある。人口激減のなか、大事に育てるべき国家の宝である幼児を、みすみす異常な親により殺させてしまうのは、まことに悲しく、皆無にしたい犯行である。また幸運にも、生き延びても、回復不可能な外傷と心の傷を受けて、児童は正常な成育を阻まれる。密室家庭内で行われてしまう犯行ゆえに、サイレンを取り付けるのはまことに難しい。病院の医師か、児童相談所の職員も、近所の隣人が、警察官が、状況察知の上に、サイレンを鳴らさねばなるまい。または、すべての幼児にITセンサーを腕輪のようなものにして取り付けて、その安全性を担保するような工夫が必要である。天網恢恢疎にでもならず、という言葉があるが、親の暴力による児童虐待には、かならず、何か兆候が出るものである。社会制度的な側面では、全国の自治体が、作成する“検証報告書”が何の情動的価値を発していないことが残念である。担当の人間が、きづいているのにサイレンがならされずに児童が親に虐待されているのである。最近の愛媛の女児の例では、父親が二度も、書類送検されていて、当局との接触を嫌い、東京に転居後、父親と母親はたいいけなこの女児を殺してしまうのである。“ママ、もーやめて”という女児の叫びがサイレンのように鳴ったが母親の心にも響かなかった。虐待当事者は、児童相談所などの追及をかわすために、転居を繰り返す。転居先の自治体のほうに情報が伝達されないことが盲点になっており、この問題の解決を難しくしている。ついでに、国民の安全から、無責任に目をそらす税金泥棒のような地方役人の習性に対しても、警告サイレンを鳴らして注意喚起しなければならない。児童虐待にいたる真因を探る努力が、もっともっと、続けられなければならない。

3. 子供の通学時の事故、事件防止の見守り

小学生や少女などの連れ去りなどで、事件にあう。これは、自治会役員が見守り委員になって、他の役員の見守っていない場所で犯行に及んだなどと論外な事件さえ起こるのである。さらに、小学生は、集団登校の際、交通事故に遭遇する。高齢の自動車運転者の事故に巻き込まれたり、運転者が携帯電話中に前方不注意運転の結果小学生の登校列に突っ込んで死傷させたなど、いろいろな事故が発生する。この種の事故防止、事件防止にもサイレンを鳴らせるはずである。サイレンを鳴らして、とにかく、児童に注意喚起したい。小学生などの所在をわからせる機器をとりつけて、現状居所把握を容易にする手がある。交通事故、児童誘拐など危険に満ちた登下校である。

4. 小学校中学校高校生の虐め自殺防止

本年6月27日、新潟の高校生の虐め自殺が発生したが、あいかわらず、教育委員会も学校長も虐め事実をつかんでいない。アンケートには予兆が出ていないと、無責任な言い訳をした。自殺した高校生は、自分で欠席通知を出しに学校に行き、その後自殺を執行したらしい。翌日28日に遺体にて発見さる。結局、虐め自殺だったとする教育委員会の謝罪は

人間味がまったく感じられない。子供の心の叫びを把握する努力にかけているし、虐め防止システムの情報システムが穴が多くて貧弱なのである。多忙な担任教師の心にサイレンを取り付けないと虐めの防止に行動しないのである。日本の教育委員会にも、同時に巨大なサイレンを設置すべきである。虐められている子の親にもつけさせる。子供の心の叫びに敏感に応動するサイレンは効き目あるであろう。

この件、文科省の責任は重い、役人は自己保身、忖度で多忙で、教育行政を放置して、生徒には目が向いていない。もちろん、文科省大臣は無能な政治家ばかりである。

5. 官僚の汚職防止

1999年に国家公務員倫理法が成立し、規定が制定された。しかし、ノーパンシャブシャブのような非倫理的な事案が次々と発生しており、公務員の全般に、毅然たる倫理規律が失せてしまい、国民の公務員に対する信頼は地に落ちている。最近の財務省、文科省の役人の不正、不祥事は、まことに嘆かわしい。財務省次官のセクハラ事件、公文書改竄、文科省局長の息子の医大不正合格を仕組んだ汚職事件、JAXAがらみの収賄容疑事案である。高級官僚のこのような行動には、サイレンを鳴らして、警告しなければならない。前財務省次官の言動には、サイレンを高らかに鳴らす異常さがあった。また、医大不正合格の仕掛けにも、医大内でサイレンが鳴ってしかるべきであり、父王は親の文科省局長のブローカ的コンサルタントとの異常な接触、家族ぐるみの交際付き合いにはサイレンが鳴って当然であろう。日大のアメフト部の問題もある。またスポーツ運営全体にかかわる文科省の責任が問われている。大臣も高級官僚も、高給給与をむさぼるだけでなく責任を果たすべきである。

文科省内にはリクルート事件での事務次官逮捕、組織的天下り事件、獣医学部新設にかかわる加計学園選定など、サイレンを鳴らすべき事案が多くあった。これらの背景には、やはり国家の元首、首相のご意向を忖度するという家畜官僚、ペット役人が増えすぎたことが真因である。トカゲの尻尾切りを得意技とする官邸人事により、増大するこの種の役人増にサイレン鳴らすべきである。サイレンがひっきりなしに鳴る省庁である。

国家公務員には厳しい倫理規定が課されている。現在の規定が定まった20年も経過しようとしているのに、より不祥事は多発し、厳しくなっている。しかし、多くの公務員が業務遂行するが、日々の業務システムにサイレンが仕掛けられていると言うことは無く、悪行は放置されていると思われる。

6. 企業の法令順守違反皆無

法令違反で倒産した企業が2015年には200件もあった。内部統制制度の頼みは内部通報制度であるが、これに認証を与えようと言う動きがある。しかし、最も大事なものはトップの姿勢である。最近発生したアルミ製品の検査データ改竄で、神戸製鋼所大安工場はJISとISOの認証を取り消された。認証機関はLRQA（ロイド・レジスタ・クオリティ・アシ

ュアランス・リミテド) という機関である。ところが、7月23日の朝日新聞報道によると、この認証機関が不正をしていたことがわかった。工業製品の品質や企業の品質管理体制を監視する認証機関が不正をしていたのでは、消費者は何を信用していいか混乱する。この不正は、無資格者が審査していたとか審査肯定を手抜きしたとかであり、事を発見したのが、認証機関が適正に機能しているかどうかをチェックする機関である公益財団法人日本適合性認定協会(JAB)である。同協会はLRQAに対して認証機関としての認定を取り消した。これを受けて、LRQAが今年6月にJISQ9100認証業務からの撤退を表明した事を知り、少しホッとした。

ヤマトホールディングスはレジェンド小倉故創業者がつくった企業で、善良な会社ということが常識化していたのに、子会社の引越し見積もりが過大で、請求が不正であったと発表した。これは元支店長の証言により明らかになったもので、意図的な過大見積もりによる、不正請求であると暴いたのである。この事案は社内告発的であるが、サイレンがかすかに鳴った事例であろう。小倉社長は良き部下を残したものである。融資業務での不正な業務遂行にて、東日本銀行が今年7月13日、金融庁から業務改善命令を出された。旧大蔵省から会長が天下ってしまった銀行であるので、“内部管理体制不備”であったという。近年、地方銀行の体力弱体化により、不祥事が目立つ。今年初めの、スルガ銀行でのシェアハウス投資向け融資の資料改竄不正、5月のみちのく銀行の複数行員での融資関係書類改竄など不正が相次ぎ、今年決算では地銀104行のうち54行が赤字であり、不正の温床になってしまう。銀行内部に不正があれば、高らかにサイレンになる仕組みが急務である。イタリアに創設されたバンカ・エチカ『倫理銀行』は、金融業界の模範例のような銀行であろう。社会や環境により良い影響を与える事業に限って融資する独自の基準を設けている。4,300社ほどの融資先には非営利団体や協同組合が多いと言う。それでも企業経営は安定しており、融資先の情報を掴む秘訣があるらしい。国債を大量に買い込むだけの、ノホホンとした日本のメガバンクは姿勢を改めるべし。頭の固い金融庁は、サイレンを鳴らすなど考えたこともないだろう。とにかく、金融の経営者には格別なインテグリティ(潔白性)が求められる事業特性があるのである。

7. 政治家の悪行暴露を推進

国会や永田町では、サイレンが鳴り響きストップしないことになるだろう。官邸のご意向にかかわらずサイレンは鳴る。官邸の最高レベルがなんとおもうともサイレンが高らかに鳴れば、常識のある政治家なら自浄作用がある。しかし“生産性がなんとかじゃ”と女性議員が声高らかに言えば、最高権力者は『私は会っていない』と、その腹心の友同士が身の潔白を口裏合わせて主張する。直近は、議員定数を増やして悪仲間を増やしている。

本年6月に、130万人の国民に本来より過小な年金支払いがなされたという事で、業務改善命令がだされた日本年金機構、その不祥事は政治の問題である。政治家は自分たちが年金で生活していないので関心がない。旧社会保険庁の解体を受け、2010年1月に設立され

た日本年金機構は、腐敗した組織改革がまったく進まない。民間出身の理事長が二代続いているが、民間出身のトップを嫌い、官僚の面従腹背が慣行になり、その働きぶりに修正がなされていない。国民の安心生活の基盤がゆらぐ年金問題には、安倍首相は我関せずゴルフに興じて夏休みを楽しんでいる。腹心の友である加計氏には、長年にわたって内閣府を総動員して大学設置の応援をしているのにである。台風、豪雨、地震、津波災害など、日本国の国民の不幸に対処すべき政治家は、国民の不安、不信などには、最大限の告知サイレンが政治家に向かって鳴らされねばならないのに、その設置さえも行われていない。政治への情報システム化は喫緊の課題でありながら、政治家の倫理観の欠如によりまったく進展しない。これは国民の責任か！

8. 善意の徳行を促すサイレンをシステムに仕込んだ地域情報システム事例

1) 情報システム化の背景

著者が居住するのは 321 世帯のいわゆる団地である。神奈川の北部に所在する横浜のチベットといわれる地域である。17 年前に移転した時は管理組合しかなく、住宅のハードウェアについての諸問題を解決するのみだった。そこで、当団地に自治会を組織して、的確な情報が住人の心に届く自治会情報システムを構築してきた。筆者は、自治会規約の理念に、“安心安全安住”を謳うことを提唱した。行動目標として、老人の孤立死皆無、幼児童の DV 事件皆無、オレオレ詐欺事件受難者皆無などをあげて、役員一同自治会設立を推進決意した。それから 7 年間の結果は、住民の安心安全安住が維持されていると誇ることができる。付け加えて、オレオレ詐欺による実損害無く、事前に防止できたなどの効果を証明している。住民のパソコン活用推進と老人のボケ防止のためのサブシステムを構築、活用を推奨してはきた。しかし当システムにおいては、専用の計算機の活用は無い。すべて手作業にて行っている。データベースもあるが、民生委員が管理する見守り対象者ファイルが紙製の台帳である。携帯電話機（ガラ携帯）と紙と鉛筆が近代武器である。少し IT 化が進んだ人はスマホを使用しているが、会員への連絡や確認は補助手段としてインターネットメールは使っているが、ほとんどは電話か口頭または面会連絡で、会えない時はメモをポストに入れておくのである。さて、自治会の基幹システムは 3 年ぐらいで安定化したので、次にサブシステムとして、ふれ愛の会と言う百世帯ぐらいある老人会を自治会の下部システムとして設置した。60 歳ぐらい以上の人を対象にしたものである。これは、きちんと運営すれば横浜市の補助金を得られるので組織化し、筆者が初代会長におさまった。

2) チーム結成と仕組みづくり

まず実質会員 60 人を特定し、個人の事情をデータベース化（と言っても紙の台帳である）した上で日常の見守り対象者十人を決定し、その活動のための見守隊を結成した。これはすぐに効果を表した。ある人の体調が悪いという情報が入ると、見守隊長は情報の確実度をクロスチェックし、すぐに自宅訪問をして様子を確認する。朝の新聞とりは隊の A さん、配達されてポストにある郵便物の部屋までへの配達には隊の B さん、ゴミだしは隊の C さん、

買い物などを手分けして行う担当などを決めて実行する。3~4日 で体調回復してくれば当該担当の臨時部隊は早速解消する。時には、見守隊は家事応援隊に変身し、食事の調達、棚上の荷物取り出し、天井の電球交換、壊れた鍵の修理など、住民の困ったことに即対応する。寡婦になった方も多いので、複数の男子隊員で訪問する健康相談や洗濯などはご婦人隊員に手伝ってもらう。そして、老化防止が大事だと、週 2 回の早朝散歩と言うサブシステムを追加し、登録者 12 人ぐらいで、朝 6 時過ぎから 1 万歩をめどに歩く。78 歳、83 歳の寡婦になったおばあちゃんが、家に引っ込んでいたのが出てきて歩く。歩くと元気が出る。おしゃべりができる。家に一人でいるとテレビに向かって話しかけると言う話を聴き、その人たちがもっとしゃべりたいと言うので、ついには、“カフェタイム交流” というのをつくり、カウンセリングセンターのスペースでおいしいコーヒーを飲む。これもカフェ専用機 2 台を自治会にて準備してもらい、筆者はカフェマスターを気取って、参加メンバーに作ってあげる。カフェラッテ 3 杯、カフェオレ 4 杯、アメリカン 2 杯、大カップもありよ！なんて臨時カフェマスターを楽しむ。最近の集まりでは、おばあちゃん方が自宅にあるお菓子を持参で参加する。色々な話題で皆がしゃべるので、会員の活性化が進んでいる。筆者の趣味もあり、ゴルフのサブシステムをこの 7 月に追加した。このサブシステムは参加者が少なく 6 人ぐらいだ。2 回の練習会とコンペ 1 回が実績で無念の日が続いている。映画を定期的に見ようと、映画の集まりもできた。当初女性向けばかりの上映で男性にはつまらないとのことで、男性向け映画の集まりもすぐできた。チョイ飲み会という集まりもできて、アルコールを楽しむメンバーが元気である。近所の飲み屋で飲むから、帰宅は同じ団地の仲間ゆえ、少々酩酊しても皆で連れて帰り、自宅に送り届けてくれる。安心して飲めると評判だ。住宅には樹木が多い。そこで花を植えたり葡萄を採集したり、花梨が沢山木に実るので、花梨酒を作る集まりや庭園作業を楽しむこともやる。夏季には朝晩の草木への水遣り隊さえもサブシステムに加えている。基幹システムがしっかりしているので、いろいろなサブシステムを追加可能。そこには常に“住民の安心安住安全”を維持するサイレンが仕込まれている。過去のあの地震時にも、“無事ですカード”がほぼ完全に機能し住民の 98%が参加した。住民のためという理念をかかげているので、住民の心に届く情報、これをサイレンというが、これを発信しなければ住民は行動しない。今後も情報の発信には工夫を加え、情報が確かに人の心に配達されるように、人間中心のシステム化に気を遣っていきたい。

あとがき

ギリシャ神話ではサイレンとは、海の妖女のことをさす。半身人間、半身鳥であり、美声で海の男を誘い寄せて殺す。このことわざから、サイレンが鳴ったら何か危険だと身構えないといけないうのだというのである。70 年以上も前になるが、筆者が幼児の時には、米軍の空襲がくるとサイレンが鳴り、防空壕に飛び込めという行動に移ったのである。誰も怪しむことなく即座に行動し、自分の命を守ったのである。筆者は、防空頭巾をかぶり、

押入れにもぐりこむことは自分でやったように記憶がある。身の回りにはリスクがたむろして、油断すると牙をむく。そのような危険に際してはサイレンが必要である。ただし、妖女、サイレンのマークのあるスタバのコーヒ屋には、そのコーヒの香りを求めて飛び込んでしまう。このときは、金ないよ！というサイレンは鳴らない。建前と本音を使い分けて生きる筆者である。お許しあれ！